

25年ぶりの再開

校長 田中 準三

先月の17日(土)～21日(水)まで5年生の自然学校を実施しました。私は前半の3日間同行しましたが、どの日も晴天に恵まれ絶好の活動日和でした。帰校後の解散式で私が「4泊5日が長かったか、短かったか」を問うとほとんどすべての子供たちから「短かった」との返答が返ってきました。それだけ充実した自然学校だったということだと思います。家庭を離れて友だちと過ごした5日間、この貴重な経験をこれからの学校生活にもしっかり生かしてほしいと願います。

「田中先生、ご無沙汰しています。」それは1本の電話からはじまりました。電話の相手は25年前に6年生で受け持った教え子でした。当時私は、長田区の真陽小学校に勤務していましたが、なんと卒業以来初めての同窓会を開きたいとの内容でした。電話をくれた彼とは年賀状のやりとり程度の付き合いでしたので驚きましたが、うれしさとなつかしさが交錯した不思議な気持ちになりました。もちろん2つ返事で承りましたが、その同窓会(参加者は私を含めて9名で、むしろクラス会といったほうが正しいかもしれません)が開かれたのがゴールデンウィーク真っ只中の先月の4日でした。25年も過ぎているので顔が分かるだろうかと案じましたが、小学生がそのまま大きくなったような感じ(?)の子がほとんどで、それは無用な心配でした。(彼らに言わせると私もあまり変わっていないそうです。)卒業アルバムを眺めながら当時の思い出や25年間の変遷をお互いが一気に話した感じで、時のたつのも忘れ、気がつけば4時間近くが過ぎていました。37歳になった子供たちですが、それぞれに成長し、立派な社会人として活躍していることを本当にうれしく思いました。

当日、私は1つのプレゼントを用意しました。それは、卒業文集とは別の作文(ひとりひとりが書いた自分の「伝記」)です。25年前、私は子供たちに、「これまで生きてきた12年間を振り返って自分自身の「伝記」を書いてほしい。それを私の思い出の宝物として大切にしたい。そして将来もし出会うことがあったらその時にそれをお見せしたい。」という話をしました。私は預かった「伝記」を製本してずっと本棚に保管していました。まるで、25年後の今を予想していたかのように…。教え子たちはその存在すら忘れていましたが、読んでいくうちに当時を思い出し、話がはずむ1つの要因ともなりました。ただ、中には子供の頃の自分の作文にはずかしさを覚えたのか、あまり読もうとしなかった子もありましたが・・・<笑> 当日は参加できなかった子たちのこともいろいろ聞くことができ、本当に有意義な時間を過ごすことができました。最後に「何年かして2回目を計画し、今度はもっとたくさんの人に集まってもらえたらいいね。」と話し合い、名残のつきない中でのお開きとなりました。

教師にとっての魅力のひとつが、自分が関わった教え子たちに卒業後も出会えるチャンスがあるということです。もちろんそのチャンスは(特に小学校段階では)それほど多くはありません。教員生活最後のこの年にこうした出会いができたことは私にとって教師冥利に尽きる出来事でした。